

国内経済情勢

概観

生産調整は多くの業種で進行しつつあり、鉱工業生産は横ばいを続けている。企業の資金需要は依然落ち着きを示している。金融機関の一部には優良取引先に対し、動意を示す向きもみうけられるが、融資態度は総じて慎重である。商品の荷動きには活気が乏しいものの、生産調整を背景に商況はおおむね底値圏にあるとみられる。

貿易収支の実勢は、輸出の好調を主因にかなりの黒字幅を持続しているが、ここ1、2か月、長期資本収支は逆調を示している。

生産投資活動は引き続き鎮静

鉱工業生産(季節調整済み)は、4月も速報で前月比+0.2%と横ばいを続けている。財別にみると、資本財、建設資材は多少増加しているが、生産財、耐久消費財は、多くの業種で引き続き生産調整が進められているうえ、春闘ストに伴う減産(非鉄、化学肥料)も加わり、減少をみた。

4月の鉱工業出荷(速報、季節調整済み)は前月比-0.5%と微減した。これには前月出荷の集中した電力向け大型機械や耐久消費財(夏物民生用電機)の反動減もかなり響いているが、生産財をはじめ総じて伸び悩みの傾向を改めていない。

このような生産、出荷の動きを映じて、4月のメーカー製品在庫(速報、季節調整済み)は前月比+0.5%と微増を示した。これには非耐久消費財(化学製品、新聞用紙など)、一部投資財(乗用車、セメント)の在庫増が大きく響いている。しかし、汎用機械など一般資本財は引き続き減少し、また

生産財も、需給が好転しつつある石油に在庫増の動きがみられるものの、全体として横ばいとどまっている。かかる点からみて、在庫調整が徐々ながら進捗する基調には変わりはないとみられる。

一方、企業の設備投資動向は、4月の一般資本財出荷が大型電気機械の減少といった特殊要因を除外してもかなり低調であった点からみて、鎮静を続けているものと思われる。3月の機械受注額(海運を除く民需、季節調整済み)は前月比+5.1%と2月に引き続いて増加した。これには非製造業からの一時的受注増がかなり響いているようである。

資金需要落ち着きの基調変わらず

4月の金融市場は、財政資金の季節的な散超(2,381億円)に加え、銀行券も比較的落ち着いた足取りを示したため、総じて平穩裡に推移した。この間本行は2,000億円に上る債券の売却を行ない、本行貸出も259億円減少した。このような市場の緩和を映じて、コール・レートは各条件物とも月初早々に日歩2厘低下したあと、3日の公定歩合引下げに伴いさらに1厘低下した。

4月の全国銀行貸出は久々に純減となった。これは、もともと資金需要に乏しい月であるなどの季節的事情のほか、経済実体面の鎮静を映じて企業の資金需要が、総じて低調を続けているためとみられる。資金需要の内容をみると、増加運転資金は自動車、造船など一部業種にみられる程度で、減産、赤字補てん関係資金の需要が続いている。かかる情勢の下で企業のうちには、採算面への配慮などもあって、銀行借入の期限前返済をはかる向きもでてきている。他方、金融機関は、貸

出内容の質的向上を旨とし、引き続き慎重な態度でのぞんでいるものの、一部には、預金歩留りのよい優良中小企業などに対し、貸出態度をやや積極化する向きもあらわれている。

4月の企業倒産は、大口倒産の一眼から、負債総額ではかなり減少したが、件数は引き続き高水準を示した。

商品市況は総じて底値圏内の小浮動、上伸力に乏し

4月から5月にかけての商品市況をみると、石油、非鉄(銅、すず)が引き続き強含みに推移しているほか、久しく軟弱基調にあった鉄鋼(板、条鋼類)に下げ渋りないし小戻しの動きがうかがわれる。しかし、3月末から4月にかけてやや小反発した繊維原糸類は、春繭減産懸念で需給が小締まっている生糸を除き、再び軟化し、織物類も末端実需の不振を映じて、軟調を続けている。また比較的早く底入れしたセメント、上質紙なども、このところ市況は足踏み状態となっている。

このように、商品市況は、生産調整などを背景に大勢としては底値圏にあるとみられるが、本格的な上伸力がうかがわれるに至っていない。これは繊維、鉄鋼などの大宗商品をはじめ、総じて供給増加懸念がなお払拭されていないうえ、景況見通し難や信用不安などから、需要期入りにもかかわらず、荷動きに依然活気が乏しいためである。

本行卸売物価は、4月は前月比 -0.1% 、5月上旬は前旬比 $+0.1\%$ と小浮動を続けている。

4月の消費者物価(東京)は、前月比 $+3.8\%$ と急騰し、月中値上がり率としては28年秋以来の最高を記録した。これは主として異常低温などに伴う野菜、果物など季節商品の暴騰(食料品 $+6.5\%$)によるものであるが、他面、家賃・地代、月謝その他サービス料金も引き続き騰勢を示している。

貿易収支はなおかなりの黒字基調を継続

4月の外国為替収支をみると、経常勘定は貿易

外収支の赤字に加え、貿易収支の黒字幅がかなり縮小(3月134百万ドル、4月31百万ドル)したため、逆調を示した。また、資本勘定も長期資本収支が前月に引き続き赤字となったため、小幅の受超にとどまり、総合では36百万ドルの赤字となった。貿易収支の黒字は、季節性を除去した実勢でも約80百万ドルと前2ヵ月(それぞれ140百万ドル弱)をかなり下回ったが、これは、米国港湾ストライキによる輸入の減少(2月)や例年を上回る期末輸出の増大(3月)などから、2、3月の黒字幅が異常に大きかったためであり、これを考慮すれば貿易収支はなお順調に推移しているものと思われる。

4月の輸出は前年同月比為替で $+29\%$ 、通関で $+34\%$ と高水準を持続し、季節調整後の実勢でも、為替、通関ともに好調を示した。商品別の動きを為替でみると、合繊、鉄鋼、船舶、自動車などが好伸を続けており、とくに米国、豪州などに対する鉄鋼や自動車の伸びが目立っている。先行指標の面でも4月の輸出信用状は前年同月比 $+32\%$ と高水準を示しており、当面輸出はなお好調を続けるものとみられる。

4月の輸入は前年同月比為替で $+11\%$ 、通関で $+4\%$ の増加を示し、また季節調整後の実勢でも、やや水準を高めた。商品別の動きを為替でみると、前記港湾スト解決に伴い大豆、とうもろこし、化学品、機械などが前年同月に比べ高水準となっており、石油、鉄鉱石、石炭なども増勢を続けている。しかしこれら以外では、繊維原材料などをはじめ落ち着きを示しているものが少なくない。先行指標をみると、輸入信用状、輸入承認とも前月に引き続きかなりの高水準を示している。しかし、当面の国内生産動向からすれば、目下のところ輸入基調に大きな変化が生じたとは思われない。